

憧れのパパと、かなえた日本一

2023年8月31日



選手たちに拍手を送る慶応の森林賢人さん

▶準決勝の土浦日大戦で笑顔を見せる慶応の森林貴彦監督＝滝沢美穂子撮影

107年ぶりに高校野球の全国選手権大会で優勝した慶応（神奈川）。23日にあった決勝のアルプス席には、森林貴彦監督の長男・賢人さん（3年）の姿があった。



子どもの頃からずっと、父

を追いかけてきた。慶応の試合に足を運び、采配を振る姿に自然と憧れた。「カッコいいな」「パパが監督をやっているから、慶応で野球をやりたい」。中学受験をして慶応普通部に入学。高校に上がると野球部に入部した。

最初の1カ月は戸惑った。自宅では「パパ」と呼ぶ。冗談をよく飛ばす、明るくて優しい親だ。野球部では「森林さん」と呼ばれる。「監督の言うことが全てではない」と部員に伝え、意見を言いやすく距離は近い。家での姿と変わらない様子に、グラウンドでもつい、「パパ」と呼んだこともある。

選手としての自分は、うまくいくことの方が少なかった。投手として入部したがストライクが入らず、2年の5月に外野手に転向。昨秋の地区大会の頃は新型コロナにかかり、練習すらできない状態だった。それでも、一番身近にいる父から自宅で技術指導を受けることはなかった。「1人の選手として平等ではないから」と、野球の話を避けてきた。

選抜大会への出場が決まった昨冬。少しずつレギュラーメンバーの練習に入るようになった。

選抜大会では背番号はもらえなかったが、補助員として同行。ボールパーソンとして、父とともに甲子園の土を初めて踏んだ。初戦で敗れたが、チームとして足りないところが見え、日本一という目標は明確になった。

だが春を終えて、調子を落とした。6月初旬、夏の神奈川大会のメンバーが発表されたが、「森林」の名前はなかった。翌日、父から話があった。「（親が監督で）難しいこともあっただろうけど、3年間お疲れさま」。涙があふれた。

直接言葉にはできないが、「尊敬する」父親と迎える最後の夏。自分にできることは何かを考え、監督との架け橋の役割を担おうと思った。甲子園ではアルプス席で声を張り上げた。「パパを日本一の監督にしたい」。それが、現実になった。優勝監督インタビューを受けるパパの姿は、いつも増して格好良かった。

(原晟也、野田枝里子)

8月23日

パパはいつにもましてカッコよかった

ヒーローインタビューで、「森林さん」がしゃべっている。カッコいいな。でも、あそこに自分の「パパ」がいることが、よくわからなくて。知らない人みたいで、変な感じ。

優勝した瞬間は実感がわかなかったけど、みんなの顔が浮かんできて、こみ上げてくるものがあった。野球で泣いたのは神奈川大会の決勝の時以来。夏の大会が始まってから今日まで、あ



っという間だった。

慶応一仙台育英 107年ぶり2度目の優勝を決め、涙をぬぐう慶応の森林貴彦監督=友永翔大撮影

毎日楽しくて、充実していた。人生で一番濃い時間を過ごせたと思う。

小学生の頃から、監督の姿を見てきた。かっこよくて、慶応に憧れた。中学受験をして慶応普通部に入学。高校では迷わず野球部に入った。

家では「パパ」。冗談も言うし、一緒に漫才のネタで笑うような明るくて、優しい父だ。野球部では「森林さん」。最初は言い間違えたり、戸惑うこともあったりしたけど、チームメートのみんなもやりやすく接してくれた。



優勝して喜ぶ森林賢人=8月23日、野田枝里子撮影



引退後に「コーチをやりたい」と言ったら

最後に2人でちゃんとしゃべったのは甲子園入りする前日。夜ご飯の時だったと思う。

「ここがゴールじゃない。気を引き締めて頑張る」と声をかけられた。「おう、まかせて」と短く返した。

最近では会えていなくて、連絡もしていない。X（旧ツイッター）でも、パパのことが流れてくるくらい。

知らないうちに、すごい人になったんだな、って。甲子園でも、いつも笑顔。ピンチでも、パパを見ていると大丈夫って安心して見ていられた。

中学生のころは休みの日になると公園でキャッチボールをしたり、ノックをしてくれたり。高校に入ってからはやらなくなったけど、コロナ禍で練習ができなかった時期はよくキャッチボールをした。「前よりは球が強くなったね」と言われたのがうれしかった。

めったに怒られることはないけれど、覚えてることがある。夜ご飯のおかずに出たシャケが苦手で、こっそり隠したら、ばれちゃった。「お母さんがせっかく作ってくれたんだから」と。

もう一つは野球の試合中。一塁コーチで、塁に出た走者にコールドスプレーをしにいかないといけないのに、ぼーっとして、二塁に行っちゃった時は怒鳴られた。人としてやるべきことをやっていないと、しかってくれる。

「パパを日本一の監督にしたい」とずっと思ってきた。本当に実現するなんて。まだ実感がないけど、ここまで来られたのは、新チームになってみんながやるべきことをやってきた結果だと思う。

大学で野球を続けるか、学生コーチになって高校生の指導にあたるか。引退後の7月、思い切ってパパに「コーチをやりたい」と言ってみた。

その時は渋られた。「人としてやるべきことをやってからじゃないと、人を教える立場にはなれない」と。

でも、ちょっと照れているようにも見えた。まだ迷っているけど、学生コーチとして、また甲子園に戻ってこられたらいいなって思う。

すっかり遠い存在になってしまったけど、パパはいつにもましてかっこよかった。

おつかれさま、いつもありがとう。帰ったら、パパに伝えたい。

「もう一回キャッチボールしよう」って。

(構成・野田枝里子)

朝日新聞
DIGITAL

父の背中を追い慶応野球部に

2023年8月23日

「お疲れさま」の言葉に、涙があふれた



アルプス席から声援を送る慶応の森林賢人=2023年8月23日、阪神甲子園球場、野田枝里子撮影

▶スタンドで応援する慶応の森林賢人さん=8月16日、宮坂奈津撮影

107年ぶりに全国選手権大会で優勝した慶応。アルプス席には、森林貴彦監督の長男・賢人(3年)の姿があった。

小学生の頃からずっと、監督の姿を見てきた。試合に足を運び、采配を振る姿に自然と憧れた。

「かっこいいな」「パパが監督をやっているから、慶応で野球をやりたい」。そう思うようになった。

中学受験をして慶応普通部に入学。高校に上がると野球部に入部した。最初の1カ月は戸惑った。

自宅では「パパ」と呼び、冗談をよく飛ばし、明るくて優しい父親だ。野球部では、部員から「森林さん」と呼ばれる。「監督の言うことが全てではない」と部員に話し、意見を言いやすく距離は近い。家での姿と変わらない姿に、グラウンドでも「パパ」と呼んだこともあった。線引きが難しかった。

野球はうまくいくことの方が少なかった。投手として入部したがストライクが入らず、2年の5月に外野手に転向した。昨秋の地区大会では新型コロナにかかり、試合はおろか、練習もできなかった。だが、一番身近にいる父から自宅で技術の指導を受けることはなかった。「1人の選手として平等ではないから」と、自分から野球の話は避けてきた。

選抜大会出場を決めた冬。少しずつレギュラーメンバーの練習に入るようになった。選抜大会では、背番号はもらえなかったが、補助員として同行した。ボールパーソンとして父とともに甲子園の土を初めて踏んだ。

結果は初戦敗退。チームとして足りないところが見えたが、日本一という目標は明確になった。だが、春を終えて、賢人は調子を落とした。6月初旬、夏の神奈川大会のメンバーが発表されたが、そこには自分の名前はなかった。

翌日、父から話があった。

「(父親が監督で) 難しいこともあっただろうけど、3年間お疲れさま」

涙があふれた。

6月に行われた引退試合。感謝も込めて、父に向かってパイを投げつけた。仲間は大いに沸いた。「他の人ではやりづらい。自分にしかできないこともある。みんなを楽しませたい」と思って」

監督との架け橋の役割を担った。

慶応は、全国屈指の激戦区・神奈川大会を勝ち上がり、再び日本一への挑戦権を手に入れた。



賢人は考えていた。いま、自分にできることはなにか。それは、グラウンドに立つ仲間と父に向かって、声を張り上げることだ。直接言葉にはできないが、「尊敬する」父親と迎える最後の夏。「パパを日本一の監督にしたい」と思ってきた。それが、現実になった。ヒーローインタビューの父親は、いつにもましてかっこよかった。帰ったら、こう伝えるつもりだ。

「おつかれさま。いつもありがとう」

(原晟也)

朝日新聞
DIGITAL

慶応・清原勝児がいま、思うこと

バットをたたきつけた悔しさの先に 2023年8月11日

第105回全国高校野球選手権記念大会 2回戦 慶応（神奈川）9-4 北陸（福井）



北陸一慶応 七回裏慶応無死、代打清原は左飛=藤尾明華撮影

慶応の清原勝児（2年）は、9-0とリードした七回裏、代打として打席に立った。

「清原くん」

名前がアナウンスされると、満員の阪神甲子園球場から割れんばかりの拍手と声援を送られた。

「歓声を力に変えようと思った。楽しむ打席を心がけた」

父はプロ野球の西武や巨人などで活躍した清原和博

さんだ。1983年夏から甲子園に5季連続で出場し、優勝が2度。甲子園で通算13本塁打の記録は、今も破られていない。父も観客席で見守っていた。大歓声の中、3球目を振り抜いた。快音を残したが、左飛に終わった。

「少し泳いだけど、感触は良かった」

選抜の仙台育英戦。延長十回 2死満塁、清原は三振に倒れ悔しがる▶

甲子園で忘れられない記憶

清原にとって、忘れられない打席がある。3月21日、甲子園。慶応は選抜大会の初戦で、昨夏に東北勢初の全国制覇を果たした仙台育英（宮城）と対戦した。九回を終えて1-1。延長タイブレークにもつれこんだ。十回表、2死満塁。慶応は5番打者の清原に打席が回ってきた。

大声援が降り注いだ。

「球場全体が応援してくれているようだった」

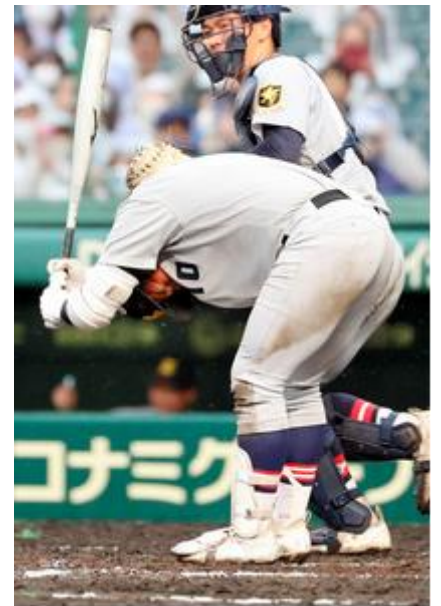
追い込まれて迎えた4球目。変化球を思い切り振り抜いたが、バットは空を切った。悔しさでバットを思い切り、地面にたたき付けた。

歓声とため息が交錯した。その直後、仙台育英にサヨナラ負けを喫した。

「あの敗戦は、自分の力不足だった」

選抜大会のあと、あの打席のことを頭の片隅に持ちつづけた。「強いスイングをする」とバットを振り込んだ。

だが、全国屈指の強力打線を誇る慶応は層が厚い。今春からブレイクした渡辺千之亮（3年）が外野の定位置に就くと、4番で左翼手だった福井直睦（3年）が三塁手になった。清原は春の神奈川県大会で、一塁手に回った。左投手の時にスタメンに名を連ねたが、打席は次第に減ってい



った。

迎えた夏の神奈川大会。背番号は「15」。控えに回った。わずか6打席で安打は出なかった。

偉大な父を持つことで、安打が出なくても取材に呼ばれることがあった。だが、**重圧ではなく、打てない自分への戒め**とした。「結果を残して取材されよう」と心に決め、1打席にかけて、いつでも打席に立てるよう準備をしてきた。

明るい性格から、部員からは「陽キャ（陽キャラ）」と言われる。良い雰囲気作りを心がけ、ベンチでは声を出し続けた。出場している選手の水分補給などのケアも先頭に立って行った。

こう言い続けた。

「チームの勝利のために自分ができることをする」

そして、慶応はこの夏、聖地に戻ってきた。

春には悔しい思いしかない。だが、その記憶を塗り替えることも甲子園でしかできない。留年したため、今年が最後の夏だ。

チームは初戦で勝利し、春には挙げられなかった甲子園での1勝を挙げた。

「清原くん」

そのアナウンスが甲子園にこだまするとき、観客席は再び大きく沸くだろう。だが、その心のうちは春の時とは、大きく違う。**自分にできることをやろう。**準備をしてきた1打席にかけよう。

「KEIO 日本一」を掲げる、このチームのために。

(原晟也)

朝日新聞
DIGITAL

慶応・清原勝児が7回に代打

2023年8月11日

レフトフライに倒れるも「楽しめた」



北陸一慶応 七回裏慶応無死、代打清原(中央)は左飛に倒れる=藤尾明華撮影

「9番、小宅くんに代わりまして、清原くん」

慶応の七回の攻撃。甲子園球場にアナウンスが響くと、4万人の観客からどよめき起きた。

清原君とは、大阪・PL学園で甲子園歴代最多の13本塁打を放った清原和博さんの次男・勝児。和博さんが観客席で見守るなか、七回の先頭に代打で登場すると、3球目の129キロ直球をとらえた。

「いい感覚だった」と快音を響かせたものの、打球は左翼手の正面へ。左飛に倒れ、拍手を送られながらベンチへ戻った。

「ものすごい観客だった。打席に立った時にたくさんの声援をいただいて感謝の思いでいっぱいです」

チームは夏の甲子園で5年ぶり白星を挙げた。父からは「楽しんでプレーしなさい」と助言されたといい、「安打は打てなかったけれど、おもいきり甲子園を楽しめた」と笑顔で振り返った。

慶応・清原和博さん甲子園に次男・勝児さん応援

朝日新聞
DIGITAL

桑田真澄さんも球場へ

2023年8月11日

北陸一慶応7回裏、代打の清原勝児を観戦する和博さん=柴田悠貴撮影

大阪・PL学園時代に全国選手権と春の選抜に5季連続で出場し、プロ野球西武などで活躍した清原和博さん(55)が11日、阪神甲子園球場を訪れた。次男・勝児さんが慶応の内野手としてベンチ入りしており、北陸との2回戦をバックネット裏で見守った。初戦となったこの日、勝児



さんは先発メンバーから外れたものの、七回無死から代打で出場して左飛に倒れた。清原さんは「いい当たりでした。よくバットを振ったと思いますし、素晴らしいスイングでした」。

慶応は今春の選抜にも出場しており、清原さんは仙台育英（宮城）に敗れた初戦の 2 回戦を観戦していた。勝児さんは選抜大会で背番号 5 だったが、今大会は背番号 15 での出場となった。清原さんは「誰よりも本人が悔しいでしょうが、それでも懸命にチームに貢献しようという姿が見られます。僕の（春夏通算で甲子園歴代最多の）13 本塁打より価値があると思っていますし」と話した。

慶応は序盤の大量リードを守り切って初戦を突破。清原さんは「次戦も普段通りの野球をやってほしい」と期待を寄せた。

いなべ総合一沖縄尚学 試合を観戦する桑田真澄さん(右)=滝沢美穂子撮影

この日は同学年で PL 学園エースとして活躍した桑田真澄さん（55）＝巨人ファーム総監督＝も視察で甲子園を訪れ、スカウトらと試合を見た。

今年は清原さんが 1 年生 4 番として、桑田さんが 1 年生エースとして夏の甲子園の土を踏み、全国制覇した 1983 年の第 65 回大会からちょうど 40 年となる。

コメントプラス 稲崎航一（朝日新聞大阪スポーツ部長）2023 年 8 月 11 日投稿

【視点】40 年といえば。今年は清原さんが 1 年生 4 番として、桑田さんが 1 年生エースとして夏の甲子園の土を踏み、全国制覇した 1983 年の第 65 回大会からちょうど 40 年となる……。実は、桑田さん、清原さんの「KK コンビ」だけではなく、巨人の水野雄仁スカウト部長も視察で甲子園を訪れています。水野さんはいわずと知れた徳島・池田高校の主力として 1982 年夏、83 年春と甲子園連覇。83 年夏は 3 連覇が有力視されていましたが、準決勝で PL 学園の 1 年生、桑田投手に完封され、特大本塁打まで浴びてしまったのです。高校野球の主役が池田から PL 学園に代わった、と言われた年でした。ちなみに、早稲田実のエースとして 2006 年夏の甲子園を制した斎藤佑樹さんも「熱闘甲子園」の仕事で甲子園に来ており、ファンから見れば何とも贅沢なというか、スターが勢ぞろいしています。

朝日新聞
DIGITAL

親子で夏制覇、清原さん万感

8 月 24 日



慶応一仙台育英 試合を見つめる清原和博さん=滝沢美穂子撮影

大阪・PL 学園時代に全国選手権と春の選抜に 5 季連続で出場し、甲子園の個人歴代最多となる通算 13 本塁打を放った清原和博さん(56)＝プロ野球の西武、巨人、オリックスでプレー＝が決勝を観戦した。

次男で慶応の内野手の勝児は九回無死、代打で登場。四球を選び、今大会初めて出塁した。清原さんはその姿に拍手を送った。勝児は試合後、「全員の力で勝てた。すごい歓声もらって自分は幸せ者だなと思った」と話した。

清原さんは PL 学園で 1983～85 年に 3 年連続で夏の甲子園の決勝に進出し、83、85 年は優勝した。大会本部を通じ、「勝児は優勝の喜びもスタメンで出られなかった悔しさもあるでしょう。しばらく、ゆっくりと高校生らしい生活を送った後、次の目標に向かってほしい」とコメントした。

朝日新聞デジタル及び朝日新聞紙の他記事もご覧ください

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission. (黄地紋・林 莊祐)